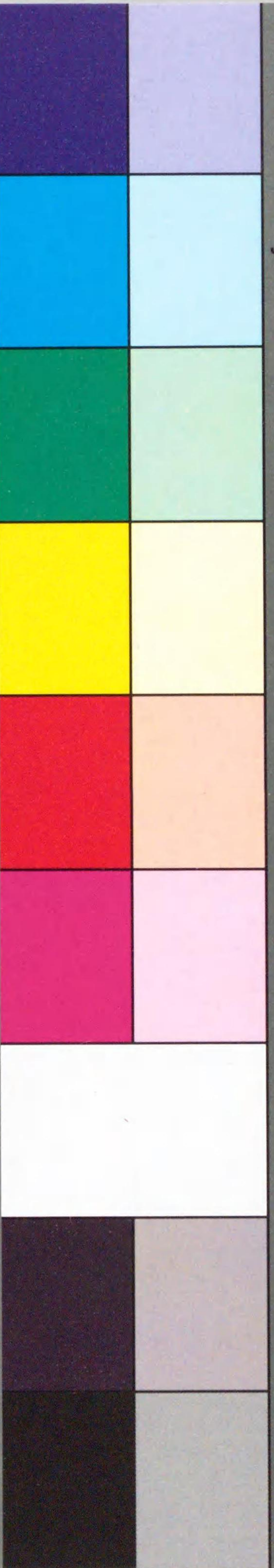


Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



029.9
To387k



000K4734

狩野文庫概説

国立国会図書館

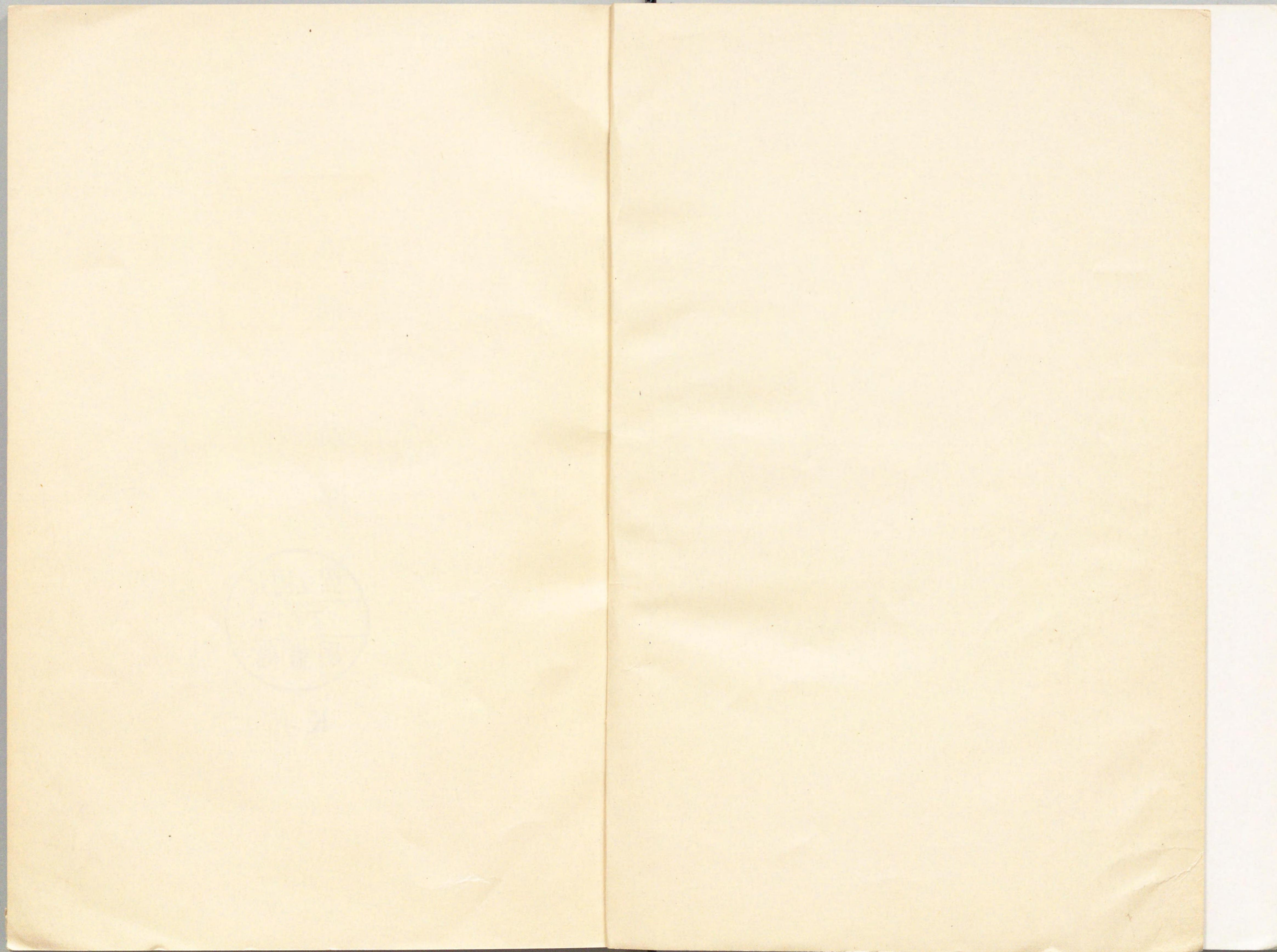
2125-98

029.9
To 387b

昭和十二年十一月

狩野文庫概説

東北帝國大學附屬圖書館



029.9T0387R



狩野文庫概説



K 1731



庫文野狩學大國帝北東

目次

圖版

- 一 東北帝國大學狩野文庫
- 二 古鈔本史記孝文本紀第十
- 三 古鈔本類聚國史卷第廿五
- 四 古鈔本聖德太子傳曆

狩野文庫について

狩野文庫分類表



庫文野狩學大國帝北東

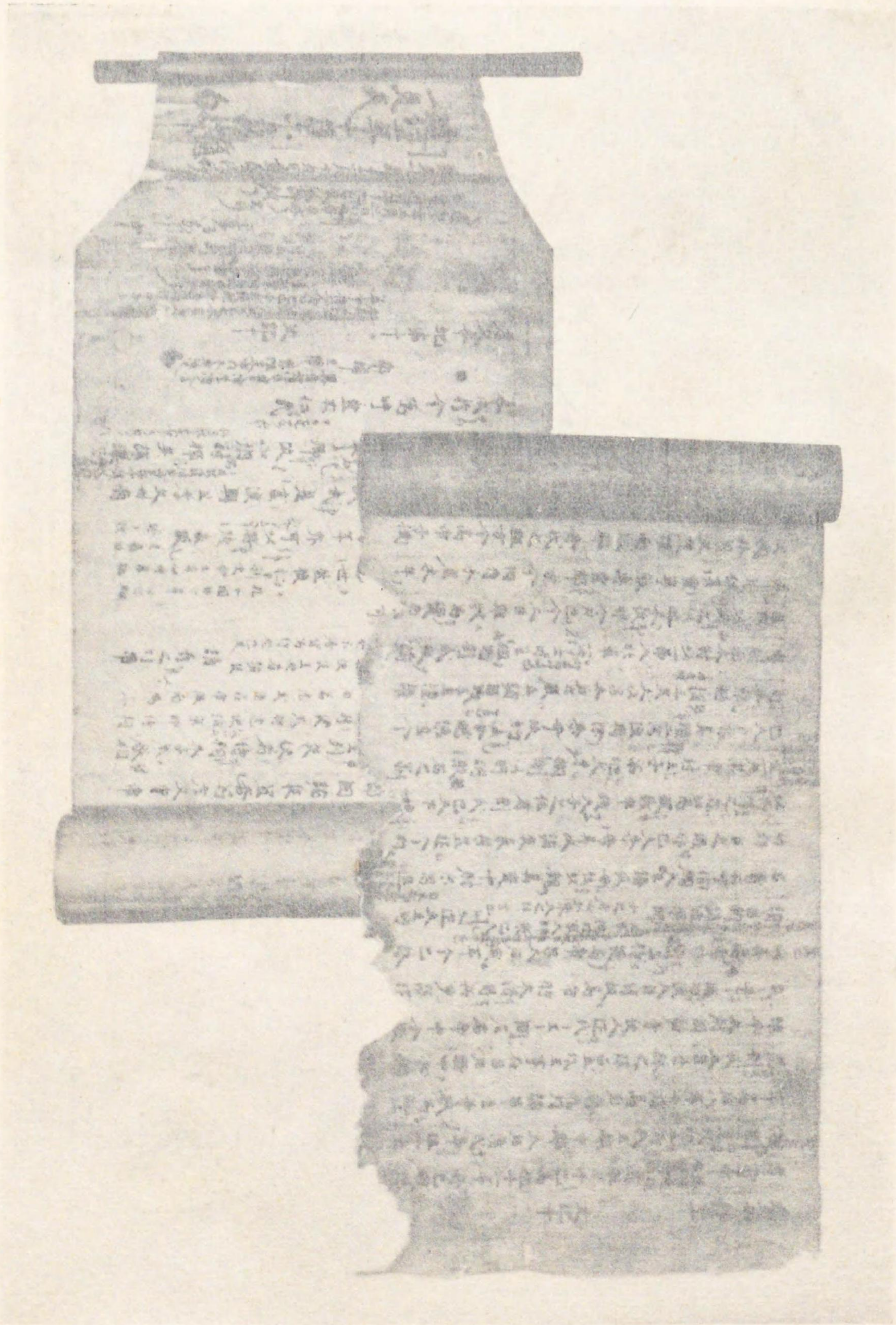
目次

圖版

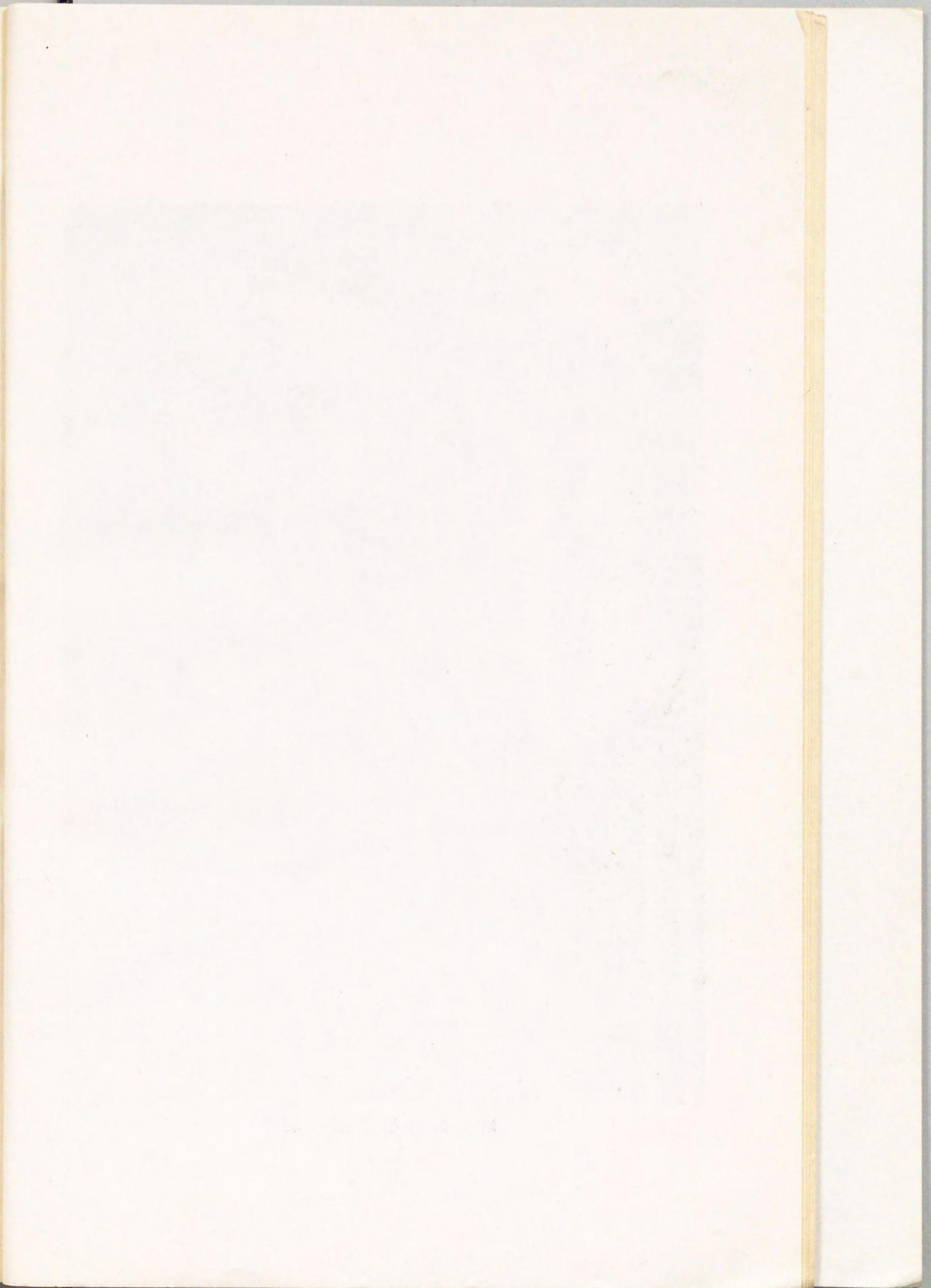
- 一 東北帝國大學狩野文庫
- 二 古鈔本史記孝文本紀第十
- 三 古鈔本類聚國史卷第廿五
- 四 古鈔本聖德太子傳曆

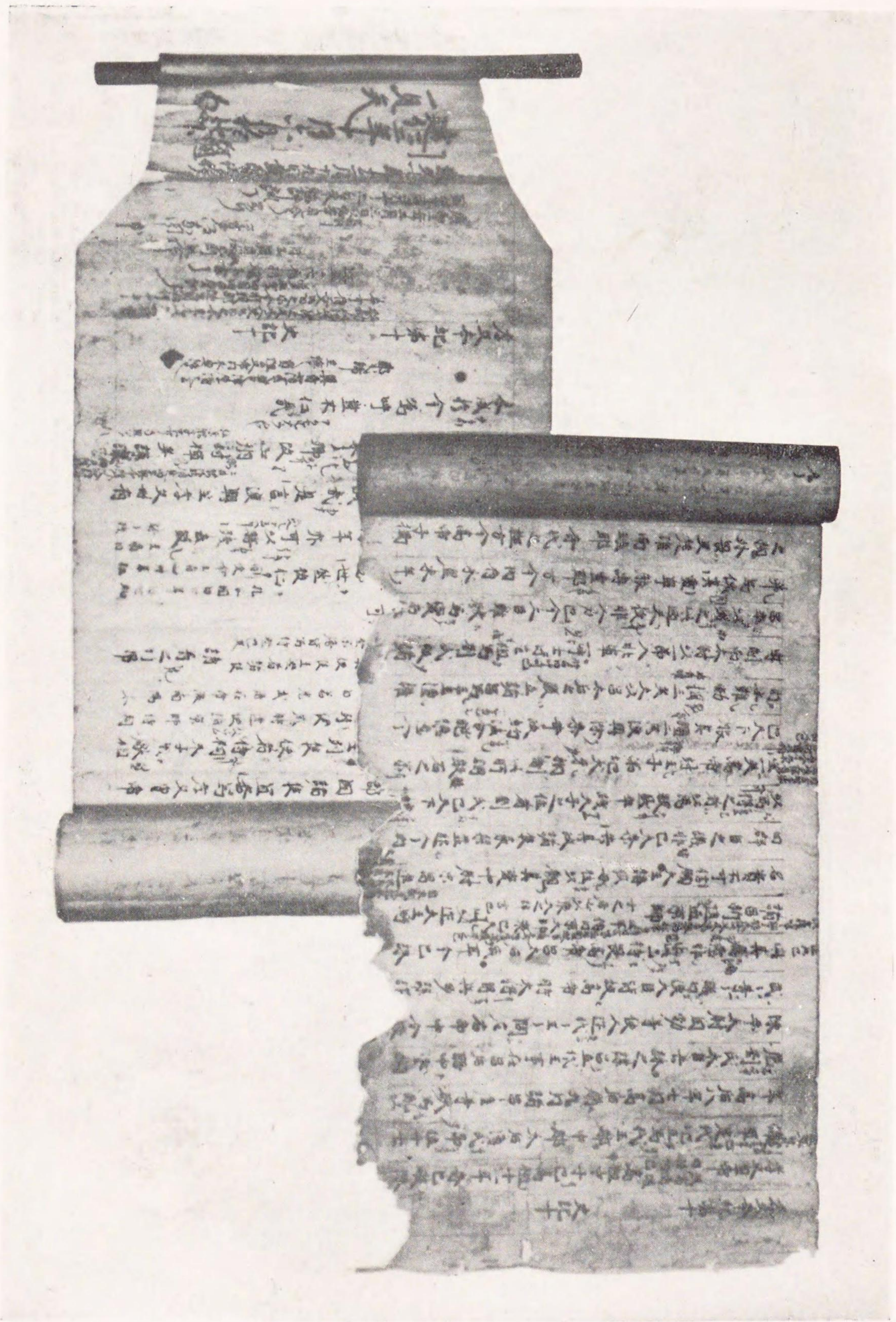
狩野文庫について

狩野文庫分類表

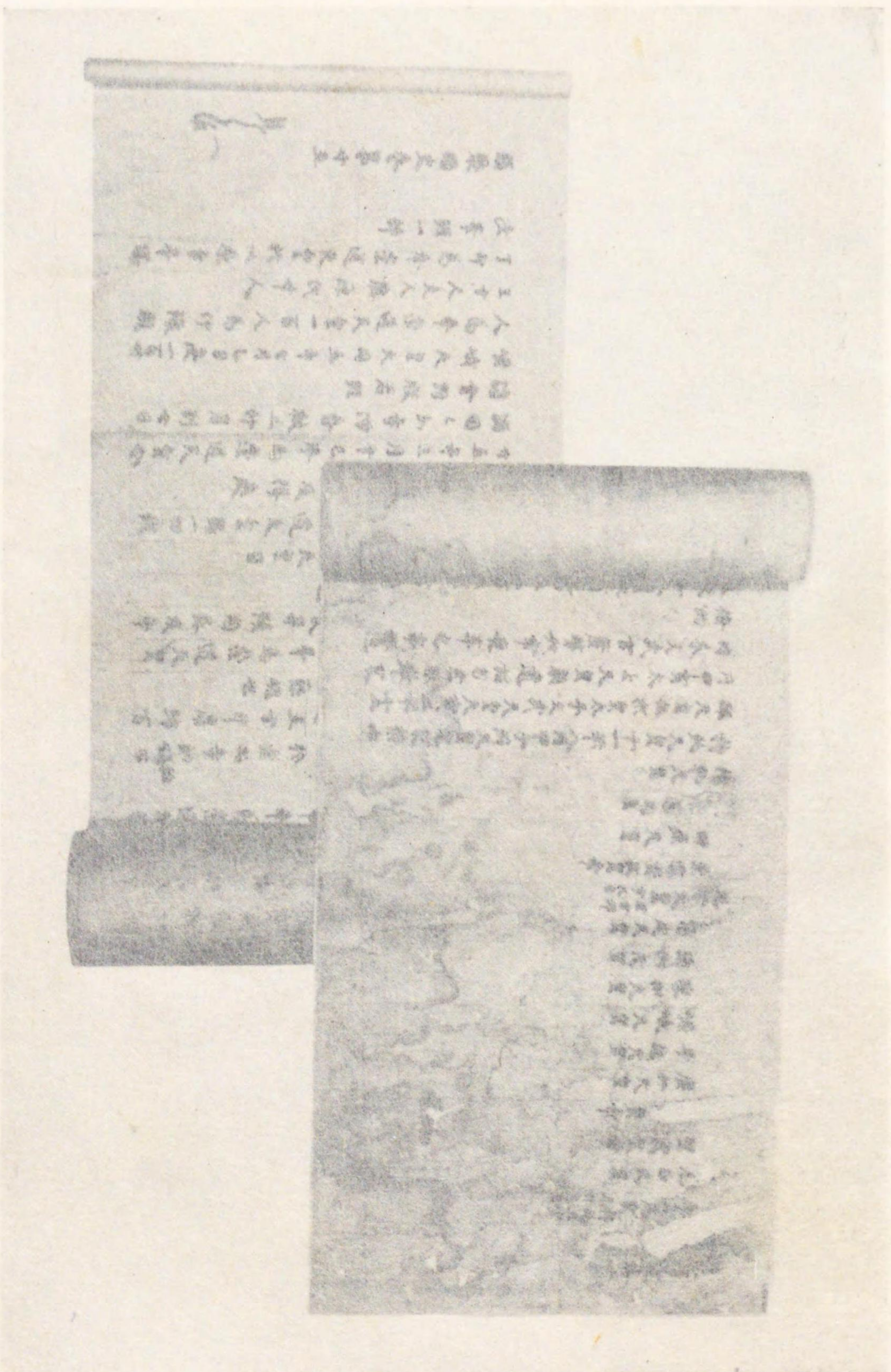


古鈔本史記孝文本紀第十



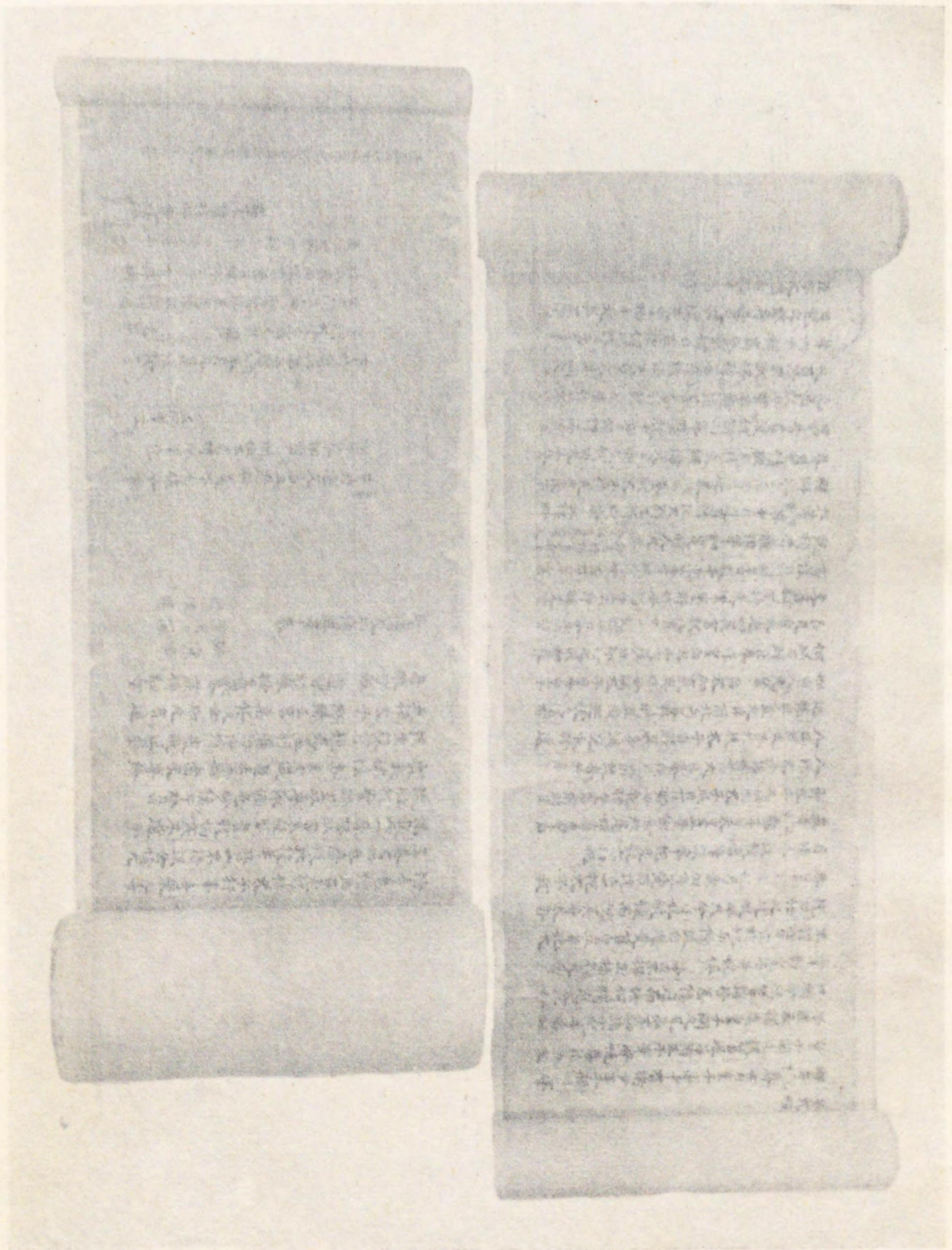


古鈔本史記孝文本紀第十



古抄本類聚圖史卷第廿五

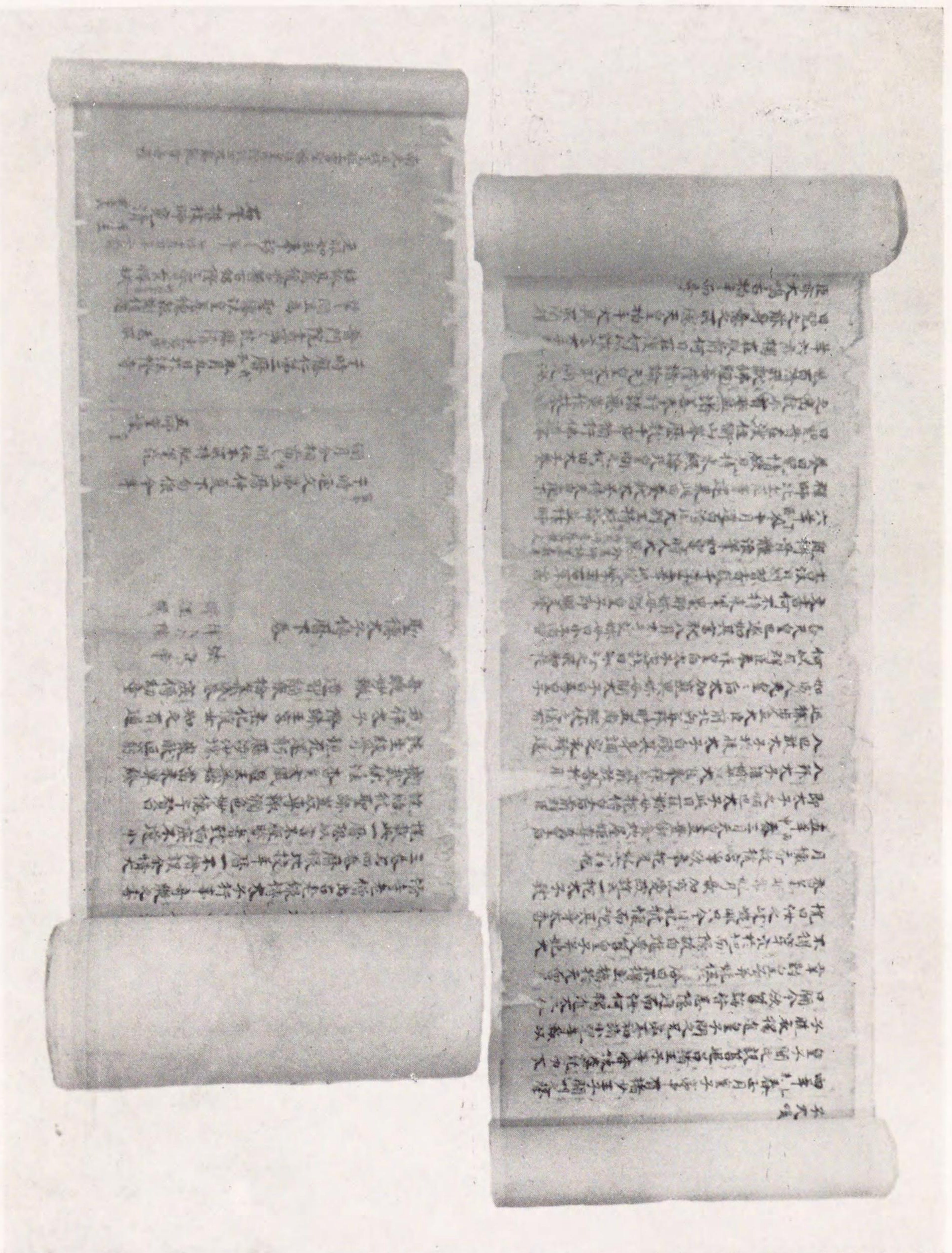
古抄本類聚圖史卷第廿五



古抄本聖德太子傳曆

古抄本聖德太子傳曆

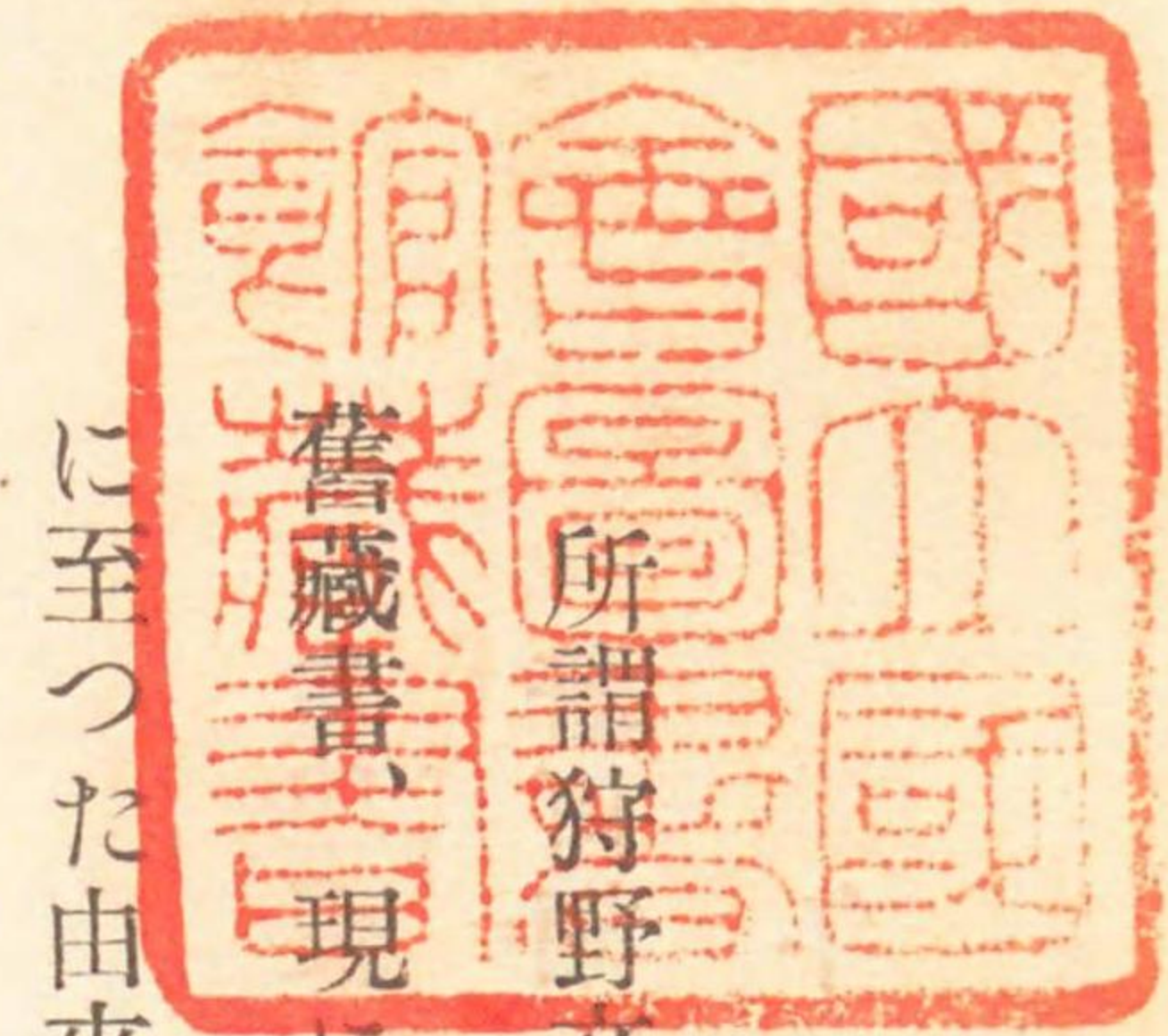
古鈔本聖德太子傳曆



乙未 春正月 壬子 聖德太子 薨於 大津 宮
 二月 乙未 葬於 大津 宮 西 陵
 三月 丙申 皇太子 立 於 大津 宮
 四月 丁酉 皇太子 薨 於 大津 宮
 五月 戊戌 皇太子 葬 於 大津 宮
 六月 己亥 皇太子 立 於 大津 宮
 七月 庚子 皇太子 薨 於 大津 宮
 八月 辛丑 皇太子 葬 於 大津 宮
 九月 壬寅 皇太子 立 於 大津 宮
 十月 癸卯 皇太子 薨 於 大津 宮
 十一月 甲辰 皇太子 葬 於 大津 宮
 十二月 乙巳 皇太子 立 於 大津 宮

聖德太子傳曆
 乙未 春正月 壬子 聖德太子 薨於 大津 宮
 二月 乙未 葬於 大津 宮 西 陵
 三月 丙申 皇太子 立 於 大津 宮
 四月 丁酉 皇太子 薨 於 大津 宮
 五月 戊戌 皇太子 葬 於 大津 宮
 六月 己亥 皇太子 立 於 大津 宮
 七月 庚子 皇太子 薨 於 大津 宮
 八月 辛丑 皇太子 葬 於 大津 宮
 九月 壬寅 皇太子 立 於 大津 宮
 十月 癸卯 皇太子 薨 於 大津 宮
 十一月 甲辰 皇太子 葬 於 大津 宮
 十二月 乙巳 皇太子 立 於 大津 宮

狩野文庫について



所謂狩野文庫は本館が所藏せる特殊文庫の一で、文學博士狩野亨吉氏が聚集にかゝる舊藏書、現に本館所藏の和漢書の根幹を爲してゐるものである。いまその本館に歸するに至つた由來、その内容等について概説しよう。

狩野文庫は左の如く前後三回を経て本館に入つた。

第一回 大正元年、貴族院議員荒井泰治氏の寄付による購入。

第二回 大正十二年、本館の經費を以て書肆大同洋行を経ての購入。

第三回 昭和四年、狩野亨吉博士からの寄付。

就中主なもの第一回で、全體の約九割を占め、後の二回はその補足をなす。而して第一回の寄付については、偶ま殘存せる當時の關係文書によつて、些か記載して後に傳へたいものがある。

事の發端について明らかにするよしはないが、當事者の間に議の熟して來たのは大正

元年九月下旬であつた。當時東北帝國大學事務官黒田賢一郎氏は、その用務をも兼ねて上京中であつたが、恰かも山形縣上ノ山客舎滞在の總長澤柳政太郎氏から、小石川區雜司谷町百十番地狩野亨吉氏氣付で廿二日付、左の如き書狀がおくられた。曰く、

前略購入圖書目錄の一部、荒井氏ニ見せ候事ニ約し置候間、狩野氏より御借受御取計相成度候。寄付願は直ニ仙臺へ御郵送相成度、速ニ許可の事ニ致し、可成早ク約束を確定し、且第一回寄付之納付を完結致し度候。事の成立上必要なる案件は、便宜御取計相成度御委任仕候。(後文略す。)

さてこの事について、荒井氏側の大學宛の寄付願の案文は、左の如きものであつた。

寄 附 願

貴學獎學資金トシテ、金參萬圓ヲ左記ノ條件方法ニ依リ、貴學ニ寄附致度候間、御許可相成度候也。

年 月 日

住 所

氏 名

東北帝國大學總長宛

記

- 一、金參萬圓ハ左ノ如ク數度ニ分チ納付スルコト。
 - 第一回 金五千圓(此金額ニ相當スル有價證券ヲ以テス)、許可ト同時ニ納付。
 - 第二回 金五千圓(同上)、大正二年一月納付。
 - 第二回ヨリ第六回。毎回金五千圓、大正三年ヨリ毎年一月納付。
- 一、右金額ヲ以テ、學術研究上有益ナル圖書類(文學博士狩野亨吉氏藏書)ヲ購入スルコト。

- 一、該圖書ハ取纏メ嚴ニ散逸ヲ防ギ、永久ニ保存スルコト。萬一貴學ニシテ廢止、又ハ仙臺市以外ノ地ニ移轉スル場合ニハ、此寄附金ヲ以テ購入シタル圖書ハ、

宮城縣立圖書館へ交付セラレタキコト。

一、毎年度ノ收支計算ノ大要ハ、貴學ヨリ報告ヲ受ケタキコト。

然るに文中第三項但書にある、大學の廢止又は移轉の場合には、宮城縣立圖書館へ交付云々の條件は、けだし仙臺出身の荒井氏としての希望にもかゝらず、所藏者狩野博士として、之を首肯しかねたところであり、こゝに事は愈々となつて難關に逢着する觀を呈した。

かくと知つた總長は、仙臺から九月廿六日付を以て上京中の黒田事務官へ手紙二通、電報一通をよせた。手紙の一つは文部省秘書課へ、一つは旅館へあてた。主なのは前者で、文言に曰く

別紙の趣意を以て荒井氏説得相成度、大體同意相成候かと存候。若し六ヶ敷候はば一寸御打電願上候。上京の上奔走致し度、是非々々事の成立候様希望候。(後略)

廿六日 澤柳 黒田殿

こ。文中に所謂別紙は、荒井泰治殿 澤柳政太郎として別封され、全文は左の如くである。

拜啓愈御清廻奉賀候。陳バ黒田大學事務官を以て、寄付條件に付御承諾の次第を以て、狩野氏へ相話し候由之處、大學の決議として、万一大學廢止移轉の節云々の事は、同氏に於て同意致兼候趣、最初申上候通り、狩野氏は少々風變一轍の人物にて、極めて窮屈に有之、就てハ貴台に於其邊御諒承之上、今日の場合は明文の條件だけの事に御承諾願度、切望に不堪候。既に明文ニ「永く仙臺市所在東北帝國大學ニ保存ス」この條件有之候以上ハ、萬一大學の廢止移轉の場合ニハ、其時に於て、必ず寄付者ニ相談を遂ぐべき筋合の事は、決議無之とも當然と存候。尙又如何ニ考ふるも、大學の移轉なごあり得べからざる事、或は財政困難の爲、廢止は想像し得べしとも存候得共、是亦大戦争にても起り、敗衄したる場合か何かにあらざれば、既設大學を廢止するが如きは不能の事と存候。御承知の如く仙臺の大學は、古川家百六

萬圓寄付の内の一部と、宮城縣寄付十五萬圓を以て創立したるもの、其廢止移轉ハ、幾んど想像し得ざる義と存候。尙法律上、單に申せば、一旦狩野氏より所有權大學ニ移り候上ハ、狩野氏に於て容喙し得る所にあらず候へバ、他日寄付條件の貴意を明にする爲に、相當の手續を爲し得る義とも存候。尙御一考を願度ハ、大學と宮城圖書館と何れか永久に存續すべきか、或は二者同様なるべしとは考へ得る義と存候得共、大學の方不安心なりとは考へられざるかと存候。尙狩野氏藏書が東北大學に入るは、即ち仙臺に一名物を添ゆる所以に有之、實際に於てハ、大學にあると縣の營造物にあると同様かと存候。尙委細黒田事務官より御聞取相成度、何分折角此邊まで相運び候間、功を一簣に缺くが如き事、萬々無之様、事成立に至らんこと、千祈萬禱に不堪候。草々頓首。

廿六日

荒井泰治殿

澤柳政太郎

第二の手紙は東京下谷東黒門町四金井旅館黒田賢一郎宛で、急と表記し、簡單に、用事の書面秘書課へ宛送附いたし置候。至急御受取相成度此段申進候。草々。廿六

日 澤柳 黒田殿

とある。而して電報一通は同じく金井旅館にて黒田賢一郎宛で、左の如くである。

ケサテガミ、ヒシヨカアテダシタ。ソレヲミテ、ミコミタシカナラ、スグアラキヲカケアヒ、モシムヅカシキミコミナラ、カケアヒヲミアハセ、スグデンポヨコセ、ソウテウ

二通の手紙の投函と同時の打電である。而して事務官の返電は、(二十七日午後四時)

アライシヨウダクノミコミナシ。ユヘニコウシヨウセズ。ゴシユツケウヲコウ。ジコクヲシラセアレ

とあつたが、之に對して總長からは、翌々二十八日付を以て、

一 一ジタツ。コンヤ八ジハン、ライシヤマツ。

と、打電された。

その後交渉の経過については、特に徴すべき文書はないが、いよ／＼大正元年九月廿八日付を以て左の如き寄付願の提出あり、十月一日付、寄付受領ノ件許可の旨が總長名義で公けに通達され、寄付完了とともに、大正六年二月十三日付で賞與方が總長から東京府知事に申請されたことは、一切を語つてゐる。而して件の正式の寄付願は、實に前文は前掲のものと同文であるが、後半の條件は、

- 一、右金額ヲ以テ、學術研究上有益ナル圖書(狩野亨吉氏藏書)ヲ購入スルコト。
- 一、該圖書ハ取纏メ嚴ニ散逸ヲ防ギ、永久ニ在仙臺東北帝國大學ニ保存スルコト。
- 一、毎年度ノ收支計算ノ大要ハ、貴學ヨリ報告ヲ受ケタキコト。以上。

とだけになつてをり、「萬一貴學ニシテ廢止」云々の問題の箇所は省かれてゐる。即ち澤柳總長の努力はむくいられて、完全に荒井氏の理解を得るに至つたのである。

なほ外に、當時狩野亨吉氏から大學あての文書の案文の左の如きものが残つてゐる。

記

- 一、圖書類 別冊目錄ノ通

此價格約拾萬圓

右拙者所有ノ處、貴學御所望ノ由ニ付、特別減價ノ上金參萬圓ヲ以テ賣渡シ可申、其方法ハ左記ノ通ニテ異議無之候。

年 月 日

住 所

氏 名

東北帝國大學總長宛

記

- 一、圖書ハ御指定ニ依リ何時ニテモ送付可致コト。
- 一、荷造運搬費ハ貴學ニ於テ御負擔ノコト。

一、代金ハ大正元年九月末日ニ於テ金五千圓ヲ受領シ、大正二年ヨリ大正六年マデ毎年一月ニ金五千圓ヅ、受領スルコト。

これがはたして正式に提出されたか否かは明らかでないが、以て讓渡の際の氏の意中を見るべきである。

その後狩野氏は、書籍の發送とともに大學側のその爲の補助の申出を辭退して、自ら目錄の編成に従事し、洋罫紙帳面四十一冊に收めて寄せられた。本館は之を上下二卷に合本して、登記目錄としてゐる。而してそのうち自第一至第二十五冊(書物番號第一號より第一萬三千七百十二號まで)は、之に大正二年九月本學開學式舉行の際、陳列の爲に送本された「貴重書の一部」及びその他の目錄を添へて、本學に於いて、大正三年二月印刷に附し、東北帝國大學所藏狩野氏舊藏書假目錄として、關係方面に配布した。

以上を第一次として、第二次は大正十二年六月、大同洋行を経て購入した古寫本朗詠集註をはじめ約一千六百三十部で、その中には書史書目類の聚書が含まれてゐる。代

價は一萬一千五百三圓八十六錢であつた。

第三次は昭和四年一月十四日付受入の狩野博士の寄付で、釋觀無量壽佛經記外五百七十六部(價格一千二百六十一圓)である。

かくて現に狩野文庫を成すところは、合計約二萬四千九百四十部、約八萬一千冊で、これらは大体(別置本、卷子本、數學教室貸出しのもの等を別として、)本館書庫第五階南寄一列を除いての全部の書架五十六本に收めてある。而して若干の洋書(大部分は明治以前舶來の諸種歐文書)を除外例として、和漢書、しかも概ね明治以前の板行もしくは書寫にかゝる所謂古典物であるが、中でも和書(唐本に對して)がはるかに多い。

而して之を一層内容的に見ると、件の和漢書は殆んど文化の凡ての方面に亘つて之を網羅し、一方に偏してゐない。和漢書目錄の含む部門項目にして、本文庫に之を缺くものは殆んどないと言へること、分類表の示す如くである。而してその各項目に於いて

は、繁簡さまざまで一樣でなく、そこに自ら本文庫の特色もある。而してもごより洩れたものも少くないが、諸方面を通じて、普通有用の書物が相應に普く集められてゐることが、まづ本文庫の大學圖書館の藏書としての價値である。加之、個々に、またある題目に於ける聚書として、それ／＼特殊の意義あるものが、相應に含まれてゐる。前者は即ち、古寫本、古刊本、名家稿本、手澤本のたぐひで、本館では之を取扱ひ上の見地からして、他のその必要あるものごにも、特別扱ひとし、そのうち更に選んで別置本としてゐる。而して狩野文庫から選ばれた特別本の類は、約二千百部、そのうち別置本の數は約五百七十部で、本館全所藏書に於けるこの種のもの、總數の、約九割を占めてゐる。而してその中には、相應に嚴密なる意味で、貴重本と稱しうべきものも少くない。例へば、延久五年寫の史記孝文本紀第十(同種の呂后本紀第九は、毛利公爵家所藏、昭和六年十二月國寶に指定された。)鎌倉時代寫の類聚國史卷第二十五(同種の卷第六十五、百七十一、百七十七、百七十九の四卷は、前田侯爵家所藏。昭和十一年五月國寶に指

定された。)應仁三年寫の聖德太子傳曆等である。次に聚書としては、書目類約二百部、地圖約一千八百八十三部、和算書約一千二百六十八部、黄表紙四百三十一部、孝經二百一十一部、金平本四十部、和漢朗詠集三十部の如きは重なるものである。和算書中には和算名家の手澤本が、比較的まごまつて收められてゐる。その他各方面の専門家の探求によつて、往々意外の發見のなざるゝことは、しば／＼遭遇するところである。

かくの如くにして、狩野文庫が學術的に和漢書の一大寶庫であることは明らかであり、本館の和漢書は實に本文庫を中心として之を増補しつゝ、累年完成に向つてをる。さればその學内に於いて利用され、關係諸方面の重要な研究資料となつてゐることは言ふまでもないが、學外に於いても相應に知られ、篤學者の本文庫閲讀を主たる目的として來館する向も、年々に多きを加へる。また藏書中、特に出願されて出版されたり、複製されたものも少くない。たごへば金平本、石橋山七騎落以下十六部十六冊の、大阪毎日新聞社によりての(大正十五年)、君臺觀左右帳記一卷の、古典保存會によりての(昭和

八年一月)、野郎古だ、み一冊の、稀書複製會によりての(昭和七年二月)複製等はその例である。而して本館に於いて時々開催し來れる諸種の展觀の場合にも、本文庫からの出品が、數に於いても質に於いても、何時も中心となつてをる。たゞへば昭和六年八月、文部省主催圖書館學講習會に際しての明治以前刊本展觀(三百二十四點)、昭和八年十月、第十次帝國大學附屬圖書館協議會に際しての書目書志展觀(二百十六點)、昭和十一年十月、東北帝國大學二十五周年記念の際に催した別置本中寫本系統のもの、展觀(三百七十五點)等は、その主なものである。殊に第一の場合の如きは、全部本文庫より選びいでた。

狩野文庫の有するかゝる價值を考へて、前述の本文庫が本學へ歸した事の由來を想起するに、吾人はこゝに、關係者諸氏に對する感謝の念を禁ずるを得ない。例へば第一回の場合に於いて、荒井泰治氏の獎學資金の寄付や、「特別減價を以て、」本大學の爲に之

を讓渡された狩野博士の好意はいふまでもないが、また澤柳總長に對しても、特に銘記すべきものを感じる。東北帝國大學に未だ文科關係の學部の存在しなかつた當時に、この巨額の寄付を、敢へて本文庫の購入に充てられたことは、大學の綜合大學としての理想を堅持し、人文的學問の、大學に於ける意義を理解して、よく幾年の將來の爲に計られた經綸の現れである。當時本文庫の購入の如きは、思ふに最も急を要しない事業であつたらう。しかもこの事のあつたが爲に、今日吾人はかゝる再び容易に得がたき貴重なる研究資源を、わが大學に有するのである。若夫條件問題の發生に遭遇するや、總長が決して之を一小事視することなく、極めて熱心に敏速に、親しくその解決に當り、關係者それらの意志を理解しつゝ、機宜の處置を講じたことは、頗ぶる多きせざるを得ない。黒田事務官が、總長の電報に接して、直ちに自分の交渉を見込なしと思切つて總長の上京を乞ふた率直の態度も、よく事を徒らに紛糾せしめなかつたものと言へよう。凡そ一事の成るのは決して容易でないのを思ふ時、吾等はこゝに、當事者殊に澤柳總長

の苦心に對して、ふかく敬意を表する。

狩野文庫はまづ仙臺高等工業學校書庫の一部を借りて之に納め、後にしばし、その閲覧室で閲覧に供したこともあつたが、大正十一年八月法文學部が設置され、同十二月に東北帝國大學附屬圖書館が新築をつぐるや、引移されて新書庫に收藏され、爾來、教官學生及びその他の閲覧に供することにも、一方その整理を續け來つた。かくてまづ前述の特別扱本また別置本の選定と、別置本目錄の刊行(昭和十一年七月)とを成し、續いて全汎にわたつて分類を修正して、今や漸うその事を了り、全目錄を印刷するの準備を整へ得るに至つた。この印刷の事が一日も早く實現して、本文庫の活用が益々容易なるに至らむことは、吾人の切望してやまないところである。

昭和十二年十月

村岡典嗣しるす。

狩野文庫分類表

凡 例

- 一 本分類は大體は本館にて慣用してゐる十門別によつたが、各門のうちでは本文庫の特色にもとづいて別に考慮を試みた。
- 一 各項目中では書名の五十音順を用ゐた。但イ、キ、エ、エ、オヲを分たない。
- 一 各門の總雜は、その分類の中に於ける第一門的のものその他概說的歴史的のものを含む。
- 一 本文庫は殆んど凡て明治以前の刊行若くは筆寫にかゝり、少數の明治以後のものを含む。それらは別に取扱はず、それぞれの項目に含めた。
- 一 洋書は明治以前舶來の蘭書を主として其の他を含む。内容によらず著者名のアルファベット順に配列した。
- 一 分類の各項目下の數字は函架箋記入の通し番號を示す。例へば一―九二
- 一 は自第一號至第九百二十一號如くである。

目次

第一門 總記 雜記	一
第二門 哲學 宗教 教育	三
第三門 歷史 地理	一三
第四門 語學 文學	二一
第五門 美術 工藝 技藝	二九
第六門 法律 政治 經濟	三六
第七門 數 學	四一
第八門 理 學	四二
第九門 醫 學	四三
第十門 工學 兵學	四七
附洋 書	四九

第一門 總記 雜書

書史 解題 書目	一一—二四
日本人編著書史 解題 書目	一—六
日本藏書目錄	六—二三
日本書肆目錄附出版書目	三四—四四
支那人編著書史 解題 書目	四五—六六
支那藏書目錄	六七—七四
類 書	七五—三三
日本人編著類書	七五—一〇一
支那人編著類書	一〇一—一三一
故事名數	一三一—一五五
日本人編著故事名數	一三一—一四三

支那人編著故事名數……………二四—二五五

叢書……………二五—三〇六

日本人編著雜叢……………二五—二七〇

日本人編著家叢……………二七—二六〇

支那人編著雜叢……………二八—二九五

支那人編著家叢……………二九—三〇六

隨筆雜考「叢書」諸項參照……………三〇—八七

和學者編著……………三〇—四八

漢學者編著……………四〇—五五

佛教家編著……………五九—五三

洋學者編著……………五三—五九

其他諸家編著……………五〇—八二

支那人諸家編著……………八三—八七

新聞雜誌……………八八—九二

新聞……………八八—八九

雜誌……………八九—九二

第二門 哲學 宗教 教育……………九三—四六四

教學總雜……………九三—九九

神祇 神道 古道……………一〇〇—一五六

神祇總雜……………一〇〇—一〇五

大神宮 諸社……………一〇五—一一〇

祭祀……………一一一—一二四

神道總雜……………一二四—一二六

神典 祝詞 準神典 (諸派ノ註釋ヲ含ム)……………一二七—一三五

中世神道 佛教神道 一三六—一三九

儒教神道 一三九—一四〇

古道 古學神道 (平田派ヲ含ム) 一四二—一五三

俗神道 教祖神道 一五四—一五六

儒學 一五七—一六五

儒學總雜 一五七—一六五

支那 一五七—一五九

日本 一五六—一六五

經書 一六六—一〇八五

經書總雜 一六六—一六七

支那 一六六—一六九

日本 一六四—一六七

易 一六六—一七三

支那 一六八—一六八

日本 一六六—一七三

書 一七四—一七六

支那 一七四—一七九

日本 一七四〇—一七六

詩 一七九—一七九

支那 一七九—一七三

日本 一七四—一七九

禮 一七九—一八三

支那 一七九—一八〇

日本 一八〇—一八三

春秋 一八四—一八三

支那 一八四—一八六
日本 一三七—一八三

孝經 一八四—一八五

四書 二〇八—二一三

四書總雜 二八六—二八六

支那 二〇八—二〇九

日本 二〇九—二一六

大學 二二七—二六八

支那 二二七—二二九

日本 二三〇—二六八

中庸 二六九—二七七

支那 二六九

日本 二七〇—二七七

論語 二七九—三〇八

支那 二七九

日本 二七九—三〇八

孟子 三〇九—三三三

支那 三〇九—三三〇

日本 三一一—三三三

諸子 三三三—三三三

諸子總雜 三三三—三三六

支那 三三三—三三六

日本 三三七—三三八

老子 三三九—三三九

莊子 三三九—三七四

支那 三三九—三六四

日本……………三六五—三七四

列子……………三七五—三七六

管子……………三七七—三八一

支那……………三七七

日本……………三七八—三八一

韓非子……………三八二—三八八

支那……………三八二—三八三

日本……………三八四—三八八

墨子……………三八九—三九〇

支那……………三八九

日本……………三九〇

荀子……………三九一—三九八

支那……………三九一—三九二

日本……………三九三—三九八

其他諸子……………三九九—四〇三

支那……………三九九—四〇〇

日本……………四〇一—四〇三

儒家

支那人儒家……………四一四—四一七

日本人儒家……………四一八—四二五

佛教

佛教附道教……………四二六—四三七

佛教總雜……………四二六—四二九

佛事寺院……………四二九—四三九

大藏經 佛教叢書……………四三九—四四〇

佛典論疏……………四四〇—四四一

悉曇聲明 三〇三—三〇九

各宗 三〇〇—三〇七

俱舍成實 三〇〇—三〇六

三論 三〇七—三〇〇

律 三〇八—三〇八

法相因明 三〇九—三三二

華嚴 三三二—三三六

天台 三三七—三〇八

真言 三〇九—三六四

禪 三六五—三四六

淨土 三四七—三六九

真宗 三六〇—三六九

時宗 融通念佛宗 三九五—三九九

日蓮宗 三六九—三七九

修驗道 三七〇—三七四

道教 三七四—三七七

術數 三七八—三九五

術數總雜 三七八—三八三

占法 三八三—三八七

陰陽道 三八九—三八一

觀相總雜 三八二—三八八

人相 三八九—三九七

家相 三九八—三九五

耶蘇教 三九〇—三九三

支那耶蘇教……………三九〇六—三九三二

日本耶蘇教……………三九三三—三九六三

教育……………三九六四—四六四九

教育總雜……………三九六四—四〇〇五

教訓「心學」參照……………四〇〇六—四二七二

武士道 第十門「兵學」參照……………四二七三—四二九八

心學「教訓」參照……………四二九九—四四〇八

幼學總雜……………四四〇九—四四三五

實語教……………四四三六—四四四三

往來物……………四四四四—四四八三

古狀……………四四八四—四四九三

女學……………四四九四—四五六七

孝節錄……………四五六八—四六四三

洋學……………四六四四—四六四九

第三門 歷史地理……………四六五〇—四六六一

歷史(文書記錄類ハ各時代ニ含ム)……………四六五〇—七〇〇一

歷史總雜……………四六五〇—四六七五

國史……………四六七六—五八八〇

國史總雜……………四六七六—四七七七

史論 史評……………四七七八—四七四九

通史……………四七五〇—四八〇〇

古代(古代至王朝) 第二門「神典」參照……………四八〇一—四八二〇

王朝時代(王朝至鎌倉)……………四八二一—四八四七

鎌倉時代(鎌倉至南北朝)……………四八四八—四八八三

南北朝時代(南北朝至室町)……………四八四—四九〇

室町時代(室町至織豐)……………四九〇—四九五

織豐時代(織豐至德川)……………四九六—五〇七

德川時代……………五〇六—五四四

維新時代及其後「德川時代」第六門「維新法制」參照……………五四五—五五六

地方史各時代史「家族史」「地理」參照……………五五九—五六一

外交史附内外人對話 唱和……………五六一—五六一

災異史……………五七二—五七三

風俗……………五七三—五七四

考古 金石第五門「拓本」參照……………五八二—五八〇

支那史 東洋各國史……………五八一—五八六

支那史總雜……………五八一—五八九

史論 史評……………五九〇—五九八

通史……………五九〇—五九三

古代……………五九四—五九七

兩漢……………五九七—五九八

魏晉……………五九七—五九八

南北朝……………五九八—五九八

隋唐宋……………五九四—五九〇

元明清……………五九一—六〇三

地方史……………六〇三—六〇四

考古 金石 第五門「拓本」參照……………六〇四—六〇六

詔令 奏議……………六〇六—六〇九

朝鮮史……………六〇九—六〇七

琉球史……………六〇八—六〇八五

東洋各國史……………六〇八六

西洋史 世界史……………六〇八七—六二二

總記……………六〇八七—六〇九一

西洋各國史……………六二〇三—六二二

傳記……………六二二—七〇〇一

傳記總雜……………六二二—六二六

日本人傳記……………六二七—六九四

御系譜 御傳……………六二七—六三四

姓氏 名字 諡號……………六三五—六四七

系譜 紋章 家族史……………六四八—六五六

合傳附人名錄(言行錄 門人錄 武鑑類ヲ含ム)……………六三七—六六七

各傳附書翰 日記 肖像……………六六六—六九四

支那人 東洋人傳記……………六九五—七〇〇一

支那人 東洋人傳記總雜……………六九五—六九九

合傳……………六九〇—六九七六

各傳……………六九七—七〇〇一

地理……………七〇〇一—九四六

日本地理……………七〇〇一—七九六

日本地理總雜……………七〇〇一—七〇三

通誌……………七〇六—七〇六

畿内……………七〇六—七〇九

京都(西京)……………七〇九—七二二

大阪……………七二四—七二五

東海道 七二六—七六九

江戶(東京) 七九〇—七三七

富士山 七三八—七三四

東山道 七三五—七五〇

北陸道 七五〇—七五七

山陰道 七五七—七六九

山陽道 七六〇—七六〇

南海道 七六二—七六五

西海道 七六五—七六九

蝦夷樺太 七六五—七七九

道中記紀行 第四門「日記」「紀行」參照 七九二—七九六

古風土記 七九七—七九五

陵墓 七九五—七九八

支那地理 東洋地理 (紀行類ヲ含ム) 七九七—八二六

支那 七九七—八〇九

朝鮮 八〇七—八一五

琉球 八〇六—八二三

臺灣 八二四—八二八

東洋 八二九—八三六

西洋地理 世界地理 (紀行類ヲ含ム) 八二九—八七六

總雜 八二九—八〇九

各國 八二〇—八三七

漂流記 八三六—八七六

地圖 名所圖會ノ類ハ「地理」各項ヲ、普請圖 建築圖 屋敷圖 寺社圖 鑛山圖 戰圖 城圖等ハ第十門諸項ヲ參照 八七九—九四六

日本全圖…………… 八七九—八三五

畿 內…………… 八三四—八三八

京都(西京)…………… 八九九—八四五

大 阪…………… 八四三—八四九

東海道…………… 八四九—八七〇

江戸(東京)…………… 八六一—八九三

東山道…………… 八九四—九〇六

北陸道…………… 九〇九—九一三

山陰道…………… 九一四—九一八

山陽道…………… 九一九—九二五

南海道…………… 九二六—九二七

西海道…………… 九二五—九四四

蝦夷樺太…………… 九四五—九〇六

朝 鮮…………… 九〇七—九三〇

琉 球…………… 九三一—九三九

臺 灣…………… 九三〇—九三二

支那 東洋…………… 九三二—九三八

西洋 世界…………… 九三九—九四三

軍事用世界諸地圖…………… 九四三—九四六

第四門 語學 文學

語 學…………… 九四六—一〇三〇

國語別項「歌學 歌論作法」「俳論作法」等參照…………… 九四六—九七五

國語總雜…………… 九四六—九四七

辭 書…………… 九四七—九五六

節用集 九五七—九五八

語 釋附方言 俗語 格言 俚諺 九五九—九五七六

文 典 九五七—九七六五

 文典 同表 雜著 九五七—九六五四

 音韻 字音 九六五—九六八五

 假字遣 文字 伊呂波 附神代文字 九六六—九七六五

支那語 九七六—九九九四

 支那語總雜附朝鮮語 九七六—九七七六

 辭 書附爾雅 說文 九七七—九八四〇

 語 釋附方言 俗語 格言 俚諺 九八四—九八六四

 文 典 九八五—九九九四

 文典附訓點 九八五—九九〇〇

音 韻 九九〇—九九七四

字 學附千字文 九九七五—九九九四

西洋各國語 九九五—一〇一三〇

文 學 一〇一三—一五六三

 和漢文學總雜 一〇一三—一〇一九五

 國文學 一〇一九六—一四三〇

 國文學總雜 一〇一九六—一〇二三

 和 歌附連歌 一〇二四—一〇九三

 和歌總雜 一〇二四—一〇六九

 歌學 歌論 歌話 作法 一〇七〇—一〇四五

 萬葉集 萬葉以前 一〇四五—一〇八七

 勅撰集 一〇八八—一〇五四

私撰集 選歌 一五五—一六九

家集 一六〇—一七七

類題集 類句集 一七六—一七八

歌合 一七九—一八三

百首千首 一八三—一八〇

連歌 一九一—一九六

俳諧 俳文 一九六—二二八

俳諧總雜 一九六—二〇四

俳論作法 二〇五—二〇九

俳諧集 二〇〇—二一九

俳文 二二二—二二八

散文 二二九—三〇〇

K 4734

日記 紀行 第三門「紀行」參照 二二九—二三六

物語 (準古物語 擬古物語ヲ含ム) 二三九—二四八

和文 (隨筆物ヲ含ム) 第一門「隨筆」參照 二四九—二五九

消息文 二五〇—二五四

戰記物 第五門「平家」第三門「國史」各時代參照 二五五—二六一

御伽草紙 假名草紙類附舞之本 二五九—二六四

浮世草紙類 (西鶴物 八文字屋物 其他元祿前後ノ小説) 二六五—二七六

讀本附實錄 二七七—二九〇

洒落本附遊廓本 二九〇—二九五

人情本 二九六—二九九

草双紙 二九八—二九九

黒本 青本 二九九—三〇三

黃表紙……………一二三四—二五六四

合 卷……………二五六五—二九九二

明治文學附西洋文學翻譯物……………二九九三—三〇〇二

戲曲演劇……………三〇〇三—三三九七

謠曲文學 第五門「能謠曲」以下參照……………三〇〇三—三〇〇六

淨瑠璃本 第五門「淨瑠璃」參照……………三〇〇七—三三六六

脚 本……………三三八七—三三九三

劇場 俳優……………三三九四—三三七九

劇場番附……………三三八〇—三三九七

滑稽文學附怪異文學……………三三九八—四二〇〇

狂 歌……………三三九八—三七八〇

狂 詩……………三七八一—三六七七

狂句 川柳……………三六七八—三六九三

滑稽小說附戲文狂文……………三六九四—四〇一五

噺本 笑話 童話附地口 繪噺……………四〇一六—四〇七七

茶 番……………四〇七八—四〇八五

異聞 怪談……………四〇八六—四一三〇

漢文學……………四一三一—四五六三

漢文學總雜……………四一三二—四一四〇

詩文話 作法附尺牘 啓箋……………四一四一—四三三八

詩文話 作法總雜……………四一四二

詩文話 作法……………四一四三—四一四七

支那人著作 (日本人ノ編セルモノヲ含ム)……………四一四八—四一九五

日本人著作……………四一九六—四三〇七

尺牘啓箋 (日本人朝鮮人ノ著ヲ含ム) 一四〇八—一四五六

總集 一四五九—一四七三四

詩文集 一四五九—一四四〇一

詩集 一四〇三—一四三三

文集 一四五三—一四六八

日本人著作 一四六二—一四七四

別集 (編者ヲトハズ凡テ作者ニヨル) 一四七五—一五〇八

漢魏六朝 一四七五—一四七五

唐至五代 一四七六—一四七九〇

宋 一四七九—一四八五

元 一四八五—一四八五

明 一四八九—一四九七

清 一四〇八—一五〇〇

朝鮮 一〇一一—一〇三三

日本人著作 (紀行 日記ヲ含ム) 一五〇三—一五〇八

詞曲小説 一五〇九—一五六三

詞曲 一五〇九—一五五〇

小説 一五五二—一五六三

第五門 美術 工藝 技藝

美術 工藝總雜 一五六三—一五七三

書 畫 一五六三—一五四九

書畫總雜 一五六〇—一五七八

書 一五七九—一六六八

書總雜 (書論 書法ヲモ含ム) 第四門「文字」參照 一五七九—一五八三

日本人法帖 墨蹟……………一五六四—一五八八

支那人法帖 墨蹟……………一五四九—一五〇五

日本拓本……………一五〇六—一六三七

支那拓本……………一六三八—一六三三

篆刻印譜……………一六三三—一六七七

花 押……………一六七三—一六八七

畫……………一六八八—一七一〇

畫總雜 (畫論 畫法ヲモ含ム)……………一六八八—一六七〇

日本人畫譜畫集……………一六七七—一六四五

支那人畫譜畫集……………一六四六—一六四二

繪 卷……………一六四三—一六四九

浮世繪 錦繪……………一六四七—一六五四

繪 本……………一六五五—一六七〇

工 藝……………一六七二—一六八三

工藝總雜……………一六七二—一六七〇

彫 刻……………一六七二

圖案 紋樣……………一六七三—一六七六

蒔繪 漆工……………一六七五—一六七六

陶 磁……………一六七六—一六七八

染 織 附刺繡 第十門「化學工業」參照……………一七八四—一六七九

造 庭……………一六九三—一六八〇

文 房……………一六〇二—一六八三

音 樂……………一六八三—一七五八

音樂總雜……………一六八三—一六五四

古代樂……………一六八五—一七二三

古代樂總雜……………一六八五—一六八六

雅樂……………一六八七—一六九五

雅樂總雜……………一六八七—一六八八

倭琴……………一六八九—一六九三

琵琶……………一六九四—一六九〇二

箏……………一六九三—一六九一六

龍笛……………一六九七—一六九三〇

箏策……………一六九三—一六九三五

笙……………一六九六—一六九四五

鼓……………一六九四六—一六九五七

舞樂……………一六九五八—一六九七八

神樂 催馬樂 東遊 風俗……………一六九七九—一七〇二五

總 雜……………一六九七九—一六九八二

神 樂……………一六九八三—一六九九五

催馬樂……………一六九六六—一七〇一〇

東 遊……………一七〇一一—一七〇四四

風 俗……………一七〇一五

朗詠 今樣 郢曲……………一七〇一六—一七〇五二

朗 詠……………一七〇一六—一七〇四五

今樣 郢曲……………一七〇四六—一七〇五二

平家 田樂 能 謠曲……………一七〇五二—一七二三

平 家 第四門「戰記物」參照……………一七〇五二—一七〇五六

田樂 猿樂……………一七〇六—一七〇六一

能謠曲 狂言 幸若 第四門「謠曲文學」參照……………一七〇六—一七二三

俗樂……………一七二四—一七三五

俗樂總雜……………一七二四—一七三二

淨瑠璃 第四門「淨瑠璃本」參照……………一七三三—一七四五

俗謠……………一七四六—一七五二

三味線 月琴 胡弓……………一七七三—一七八一

一絃琴 二絃琴……………一七八三—一七九四

琴曲……………一七九五—一七二八

尺八……………一七二九—一七三〇

舞踊……………一七三二—一七三五

支那樂……………一七三六—一七五六

洋樂……………一七五七—一七五六

技藝 (魚釣ハ第六門「水産」ニ入ル)……………一七三九—一七七二

蹴鞠 附打毬……………一七三九—一七六五

鷹……………一七八六—一七四五

茶道……………一七四五—一七五九

香道……………一七五九—一七六三

花道……………一七六〇—一七六九

盆石 (盆栽ハ第六門「園藝」ニ入ル)……………一七六〇—一七六七

圍碁……………一七六八—一七六九

將棋……………一七六九—一七七五

投壺 投扇……………一七七六—一七七八

揚弓……………一七七〇—一七七二

雙六……………一七三二—一七三六

骨牌……………一七三七—一七四一

雛人形……………一七四二—一七四三

貝合……………一七四四—一七四六

拳……………一七四七—一七五〇

考物 悟繪……………一七五一—一七五五

奇術……………一七五八—一七六六

紙細工……………一七六七—一七七二

紙 鳶……………一七七二

第六門 法律 政治 經濟……………一七七三—一八三三

儀禮 (軍禮ニツイテハ第十門「兵學」ヲ見ヨ)……………一七七三—一八六一

儀禮總雜……………一七七三—一七七六

朝儀 年中行事……………一七七七—一七九〇

有職故實 典禮……………一七九〇—一八三四

喪制 服忌 (釋親ヲ含ム)……………一八三五一—一八三九

西洋禮法 (翻譯書ヲ含ム)……………一八六〇—一八六六

法律……………一八六六—一八六九

法律總雜……………一八六九—一八七四

古代法 (律令格式類)……………一八七五—一八八七

中世武家法……………一八八八—一八九六

近世武家法……………一八九七—一八九九

公家官職……………一八五〇—一八六〇

武家官職……………一八六二—一八六三

支那朝鮮法律……………一八六三—一八六六

西洋法律 (萬國公法ヲ含ム)……………一八六七—一八六八

條約 一八八四—一八八六

政治 一八六九—一八九三

政治總雜 一八六九—一八七三

獻議上書 (擬策ヲ含ム) 「國防」參照 一八七四—一八八六

國防 第三門「維新時代及其後」 「外交史」參照 一八四七—一八九〇

支那朝鮮政書 一八九〇—一八九四

西洋政書 一八四三—一八九四

維新法制附明治初期法制 第三門「維新時代及其後」參照 一八五〇—一八九三

經濟 (西洋翻譯書類ハソレソレノ項ニ入ル) 一八八四—一八九七

經濟總雜 一八八四—一九〇七

農政 土地制度 一九〇八—一九〇三

農業 農時 一九〇四—一九一八

牧畜 一九〇一—一九〇二

養蠶 一九〇三—一九〇四

園藝 第八門「植物學」參照 一九〇一—一九〇二

鑛業 第十門「採鑛冶金」參照 一九〇三—一九〇四

林業 一九〇五—一九〇六

水產 一九〇三—一九〇四

工業 (酒造製紙ヲ含ム) 第十門「化學工業」參照 一九〇五—一九〇三

商業 第七門「測量附航海術」參照 一九〇三—一九〇六

交通 一九〇三—一九〇六

勸業 (博覽會ヲ含ム) 一九〇九—一九〇六

貨幣 一九〇七—一九〇九

度量衡 一九〇〇—一九〇二

社會問題

.....一九四七—一九五三

備荒救恤

.....一九四七—一九五五

一揆騷動其他

(公娼私娼植民人口等ヲ含ム)一九五一—一九五三

財政統計

.....一九五四—一九五〇

財政 (稅ヲ含ム)

.....一九五四—一九五三

統計

.....一九五三—一九五〇

家政

.....一九五四—一九八三

家政總雜

.....一九五四—一九五七

料理

(式法故實獻立等ヲ含ム) 第六門「有職故實典禮」參照一九五八—一九七四

菓子

.....一九七二—一九七七

支那西洋料理

.....一九七二—一九八五

裁縫

.....一九七六—一九七九

折結包物

.....一九七九—一九七五

日用秘事

.....一九七九—一九八三

第七門 數學

.....一九八四—二〇三三

數學總雜

.....一九八四—一九八二

和算

.....一九八三—二〇八六

書目

.....一九八三—一九八三

塵劫記

.....一九八四—一九八三

改算記

.....一九七四—一九八八

諸種和算書

.....一九八八—二〇六四

名家本

(和算家稿本手澤本ノ比較的マトマレルモノ)二〇六八—二〇八六

會田安明本

.....二〇六八—二〇六三

岩井(重遠雅重宣賢)本

.....二〇六四—二〇七二

尾崎研齋本 二〇七三—二〇七五

白石長忠本 二〇七五—二〇七八

瀧川有义本 二〇七八—二〇七九

古川(瑠璋氏清)本 二〇七九—二〇八二

支那數學 二〇八二—二〇八四

洋算 二〇八四—二〇八七

曆象附時計 第八門「天文學」參照 二〇八七—二〇九三

和漢曆書 (對曆 洋曆ヲ含ム) 二〇九三—二〇〇〇

佛曆書 二〇〇一—二〇一九

時計 二一一〇—二一一三

測量附航海術 二一一三—二一一五

第八門 理學 (西洋翻譯書ハ各項ニ含ム) 二二三四—二二六八

理學總雜 二二三四—二二六二

物理學 二二六三—二二八四

天文學 第七門「曆象」「航海術」參照 二二八五—二二四七

地震學 二二四八—二二四五

氣象學 二二四六—二二四三

化學 二二四四—二二七三

博物學 二二四四—二二五〇

礦物學 二二五〇—二二五一

植物學 第六門「園藝」第九門「藥物科」參照 二二五二—二二六二

動物學 二二六三—二二六八

第九門 醫學 二二六九—二二七六

醫學總雜 二二七九—二二八六

漢方

漢方總雜

二六八七—二六九三
二六六七—二八四五

〔解剖生理〕

〔洋方ノ「解剖科」「生理科」ニ入ル〕

本道（内科）

二八四六—二三四三

外科

一三四四—一三九六

產科 婦人科

一三九七—一三四六

小兒科

一三三七—一三七八

眼科

一三三九—一三九三

梅毒科

一三九四—一四〇〇

口中科

一四〇一—一四〇八

痘疹科

一四〇五—一四一八

疫病科

一四一九—一四八三

鍼灸按摩科

一四八四—一四五四

診科

一三五五—一三五五

養生科

一三五四—一三五九

藥物科 第八門「植物學」參照

一三五三—一三七四

獸醫科

一三六五—一三六九

日本古醫方

一三六四—一三七四

洋方

一三七五—一三八六

洋方總雜

一三七五—一三七三

解剖科

一三七三—一三七六

生理科

一三七七—一三七〇

藥物科 第八門「植物學」參照

一三七七—一三九九

病理科

一三九五—一三九九

法醫學……………三七九八

衛生科……………三七九八—三八〇七

治療法……………三八〇八—三八二一

內科……………三八二二—三八三五

外科……………三八三六—三八四四

眼科……………三八五五—三八五七

產科 婦人科……………三八五八—三八六二

小兒科……………三八六三

花柳病科……………三八六四—三八六五

精神病科……………三八六六

種痘科……………三八六七—三八七〇

流行病科……………三八七一—三八七六

第十門 工學 兵學

工學……………三八七七—三四七四

 土木……………三八七七—三九五五

 建築……………三九五六—三〇四八

 機械……………三〇四九—三〇五五

 化學工業第五門「染織」第六門「工業」參照……………三〇五六—三〇六八

 採鑛冶金第六門「鑛業」參照……………三〇六九—三〇七〇

兵學……………三〇七一—三四九四

 武教……………三〇七一—三二五九

 兵法……………三二六〇—三三四五

 陸戰備立圖……………三三四五—三三四八九

 海戰……………三三四九—三三五二

築城附城圖

三三二—三三八五

戰史附戰圖 第三門「軍事用世界諸地圖」參照

三七八六—三六九六

武 技

三六九九—四三六六

武技總雜 各項「兵法」參照

三六九九—三九四四

刀 術 武器ノ「刀劍」參照

三九五五—三九四四

槍術附長刀術

三九四五—三九四八

弓 術 武器ノ「弓矢」參照

三九四九—四二四

砲 術附花火 武器ノ「鐵砲」參照

四二五—四二〇一

柔 術

四二〇一—四二二一

馬 術

四二二—四三二

水 泳

四三三—四三二

相 撲

四三三—四三三

捕 術

四三五—四三六

武 具

四三七—四六五

武具總雜

四三七—四四九

甲 冑

四四〇—四五二

刀 劍

四五三—四五九

弓 矢

四五九—四六四

鐵 砲

四六五—四六五

外國兵學

四六六—四七四

支那兵學

四六六—四六五

西洋兵學

四六六—四七四

附洋 書

四七五—四九三

清華書

西華大學

文匯書局

徐開漢

謝道

仁

氏

甲

角具

角

海

訂正

〔概説〕

一六頁 六行 (昭和十一年七月) 誤

(昭和十一年十月) 正

〔分類表〕

六頁	三行	一八六四―二八五	一八六四―二〇八五
〃	五	二〇八六―二二二六	二〇八六―二二二六
一七	二	支那人東洋人傳記	支那人東洋人西洋人傳記
〃	三	支那人東洋人傳記總雜	支那人東洋人西洋人傳記總雜
凡例第二項	五	五	五

F125-98



Small white label on the spine, containing illegible text.